「桃太郎～侵攻と、侵略の間にあるもの」

●ボクのお父さんは桃太郎というやつに殺されました

日本新聞協会広告委員会が、毎年異なるテーマで作品を公募する「新聞広告クリエイティブ･コンテスト（2021年度で終了）」。今から9年前、2013年度のテーマは「しあわせ」でした。

1069の作品が応募され、その結果、最優秀賞となったのが、山崎博司さんのコピー「めでたし、めでたし?」でした（図）。このイラストの下部に、

「一方的な『めでたし、めでたし』を、生まないために。広げよう、あなたが見ている世界。」

というコピーを入れています。
山崎さん自身は、この作品に次のようなコメントをされていました。

「ある人にとってしあわせと感じることでも、別の人からみればそう思えないことがあります。
反対の立場に立ってみたら。ちょっと長いスパンで考えてみたら。別の時代だったら。
どの視点でその対象を捉えるかによって、しあわせは変わるものだと考えました。
そこで、みんなが知っている有名な物語を元に、当たり前に使われる「めでたし、めでたし。」が、異なる視点から見ればそう言えないのでは?ということを表現しました。
広告を見た人が一度立ち止まり、自分の中にさまざまな視点を持つことの大切さを考えるきっかけになればと思っています。」

皆さんも、覚えていたかもしれません。私は、とても印象深く心に残っています。

ところで、最近、気になってこのコピーをめぐる受け止め方を調べてみると色々な反応があったということが分かりました。もちろん、中には、否定的に拒絶するような受け止めかたもありました。

しかし、肯定的に見える評価でありながら、私には、意外というか、むずかしい問題が私たちにはあるのだということを感じました。

●正直者はバカを見る?

私は、このコピーから、自分にはいつの間にか、桃太郎を自分の立場で考えている、ということを教えてくれていると受け止めました。

それは、ハッと気づくと、

「自分は正しい、自分は善人。相手は間違い、相手が悪人」

と思い込んでいることがあるということです。

この気づきは、私にとって、自分は果たして正しい行いをしていると言えるだろうかと自分を見つめ直し、問いただすことを忘れているのだと教えてくれるということです。

このことをめぐって、以前、親鸞聖人の教えを知識ではなく、実感として教えてもらった印象深い逸話があります。

それは、真宗大谷派の教団改革を訴え、宗務総長にもなった僧侶、暁烏敏（あけがらすはや）（1877～1954）師が講話で語ったものです。

師が、『歎異抄』に説かれる親鸞聖人の有名なお言葉、

「善人なおもて往生を遂ぐ　いわんや悪人をや」
（善人が往生するのであれば、ましてや悪人はいうまでもない）

を示されると、聴講していた人が、「（悪人が救われるのならば）、正直者がバカを見ます」と問いをしたというのです。

暁烏師は、間髪（かんぱつ）を入れず、「正直者?　いるなら前に出ていらっしゃい」と喝破（かっぱ）したというのです。

私たちは、「正直者はバカを見る」と言う時、気づかぬうちに必ず、自分が正直者の側に入るように人と人の間に線引きをしています。「あいつは不正直」「この私は正直」、だから「正直者はバカを見る」という具合です。

そのように表面的にしか物事を見ていない私自身を問いかける根源的な目覚めた世界や、そのような目覚めさせるはたらきを、浄土真宗の教えでは、浄土といい、阿弥陀仏というわけであります。

●念仏を生活習慣として成っていく

親鸞聖人の教えは、仏教が導く「さとり」、涅槃を目指して、在家生活の中で念仏を生活習慣として、称える念仏に呼びかけられ、気づかされ、目覚め、思い上がっている自分を知らされて、救われていくものです。

そしてそれは当然ながら、日々の暮らしの中で、自分が気づいていないこと、片寄ってものを判断していたことなどを教えてくれるものです。

さて、桃太郎を自分と重ねて見ることを大切にしたいと思います。

さらに、桃太郎は、ウクライナのナチズムから人びとを解放するという詭弁で、侵略しようとしているロシアではないかというのでは浅い話だと思いました。

そこからさらに深くものを見ると、かつて、アジア解放のためだといって、アジア侵略をした「大東亜戦争時代の日本」と重ねて見るということを忘れないようにしたいと思いました。

自分を「鬼」と重ねて被害者意識で生きるならば、それこそ、「正直者はバカを見る」と言って、自分を正当化する意識と変わらないものだということになるでしょう。

欧州出身の社会心理学者でありながら、仏教の本質を深く捉えた、E･フロム（1900～80）は、人間のあり方を「持つこと」と「成ること」の二つの方向性で教えてくれます（同著「生きるということ」紀伊国屋書店、1977年。2020年に新装版刊行）。

そして、私たちは、より多くのものを「持つ」こと、奪うことを求めているけれども、相手の苦しみや悲しみを無くしていくために自分が犠牲になることをも厭わないような人間に「成る」こと、心を成長させたいという思いをその根底に有しているといいます。

暴力を使うかどうかは別として、少しでも何かを手に入れると、さらにもっともっとと求める欲望が私の中にもあることは間違いありません。しかし、生きるということは、他者との関わりの中で、他者のあり方に関心を持ちながらで、つねに自分のあり方を通して、物事を見つめることを忘れてはならないと思います。

世の中に起こる様々な出来事を、人ごととして通り過ぎてしまうことの余りにも多い私ですが、改めて、自分自身の姿をそこに見届ける生き方、それは、私を問いにし続ける念仏を称えるという生活習慣をこれからも大切にしなければならないと教えられました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。